

子どもの目の異常は5歳までに保護者が発見しよう！

弱視は、視覚感受性期であれば治療・訓練で治ることが多いと言われています。

視力の異常を早期発見するために、3歳児健康診査後もお子様の目にご留意いただき、

家庭で次の項目に一つでも☑がつく場合は、眼科を受診しましょう！



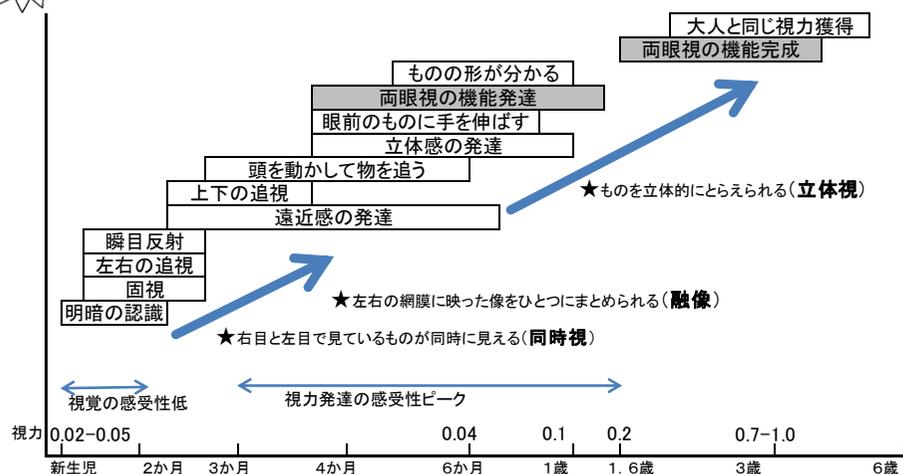
視力チェックリスト

- 目が内や外に寄ることがある
- 目が上や斜めにずれることがある
- 物を見るとき、近づいて見る
- 物を見るとき、目を細めて見たり、しかめて見る
- 物を見るとき、頭を傾けて見たり、横目で見ると
- 物を見るとき、あごを引いて上目づかいで見ると
- 物を見るとき、あごをあげて見る
- 明るい所や戸外でまぶしがったり、片目をつぶる
- 目を開いているときにまぶたが下がっている
- お子さんの目を見つめた時に目が揺れている
- 暗い所ではいつまでも動きがにぶい
- 瞳(黒目の中央)が白っぽく見えることがある
- 黒目の大きさが左右で違う
- その他、目について心配なことがある



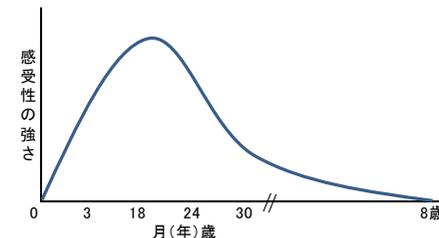
子どもの視力の発達

眼科的異常の診かた—小児科より—(戒寛:小児科診療)



視力の感受性

視覚の発達する時期(視覚感受性期)は、限られていません。視覚感受性は、生後1か月から上昇し始めて1歳半ごろにピークに達し、その後、徐々に減衰してだいたい8歳ごろまでに消失すると考えられています。



この感受性期は、弱視の治療効果にも影響しやすい時期といえます。いいかえれば、感受性の高い時期ほど弱視治療に対する反応がよく、感受性が減るほど治療に対する反応が悪くなります。

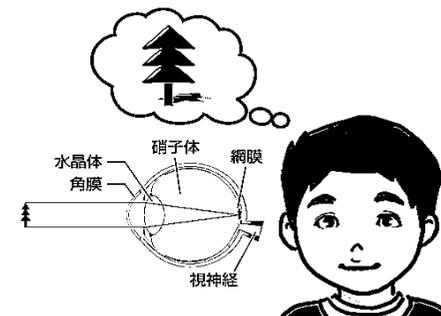
成長する過程で問題が生じて正常に発達できないと、見る機能に影響を及ぼす可能性があります。問題を残したまま、視覚感受性期を過ぎてしまうと、年齢が大きくなってから治療を始めても手遅れになってしまうことがあります。



弱視

物は、角膜、水晶体、硝子体を通して、網膜の中心窩(ちゅうしんか)にピントが合った後にその情報が視神経を通して脳に伝わります。

弱視はこの視覚情報が伝わる経路のどこかに支障があるときに生じます。



© Japanese Ophthalmological Society

(1) 網膜に光を通しにくい(形態覚遮断弱視)

- ✚ 眼瞼下垂 …生まれた時から瞼が下がっている。
- ✚ 角膜混濁・白内障 …黒目の部分が濁っている。

(2) 片方の目の位置がずれている(斜視弱視)

- ✚ 斜視弱視 …物を見ようとするときに片目は正面を向いていても、もう片方の目が違う方向を向いてしまっている状態のことを斜視といいます。片目の視線がずれている場合、その目が使われないために視力が発達しません。

(3) 網膜にきちんとピントが合わない(屈折異常弱視)

- ✚ 両目に強い遠視や乱視があると網膜にピントが合いません。

(4) 右目と左目の屈折度数に大きな差がある(不同視弱視)

- ✚ 右目と左目の屈折度数(近視、遠視や乱視などの屈折異常の程度)の差が大きいと、度数の大きいほうの目にはピントが合わず、その目が使われないために視力が発達しません。

—日本眼科学会ホームページより抜粋—

※ご不明の点は最寄りの保健相談所にお問い合わせください